

教職員自己紹介

一ノ瀬 裕 (いちのせ ゆたか)

知能情報学科・教授

1973年に九州大学工学部電子工学科を、1975年に九州大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程を、それぞれ卒業しました。卒業論文のテーマは、声紋を描く装置の改良に関するもの、また、修士論文のテーマは、耳の中の蝸牛(かぎゅう)と言うかたつむりの形をした器官の中にあり、耳に入って来る音で振動する膜(この膜が振動することによって音を感じる)の振動の仕方に関するものでした。

1975年に日本電信電話公社(現在のNTT)に入社し、約10年間、電話機のベル(磁石電鈴)の改良や、1985年の民営化に向けて開発されることになった(ICを用い、高機能化とデザインの多様化を狙った当時としては画期的な)新しい電話機に用いる薄型の送話器・受話器などの電気音響変換器およびこの電話機のデザイン・実装の研究実用化に従事しました。

1986年以降は、研究所と事業部門とを行ったり来たりで、ビジネスホンなど会社で使われている電話システムの商品化を担当したり(事業部門)、会議用の音響システムを研究したり(研究所)、総務・企画・人事などを担当したり(事業部門)といろんな仕事を体験しました。

1994年からは、再び研究所で、非接触で動作するIDタグ(CDショップなどで万引き防止のために商品に貼られているものの高度なもの)や非接触のICカード(公衆電話機に使われるようになった)などの研究に従事しました。

1997年に、けいはんな学研都市(京都・大阪・奈良の県境にある)のATR人間情報通信研究所という研究を専門に行う会社に移り、そこで社長として人のコミュニケーションに関わる基礎基盤研究の研究管理に従事しました。大臣・国会議員・出資企業の社長・新聞記者・大学教授・学生など幅広い分野の見学者を相手にして、研究成果を分かりやすく説明することの難しさがこのときほど身にしみたことはありません。大学での講義は初めてですが、これらの経験を踏まえて、できれば「良く分かり、面白い」講義に、それがダメでも「良くは分からないけど、なんか面白い、楽しい、記憶に残る、そして将来何らかの役に立つ(きっかけになる)」講義にしたいと思っています。

(注: Web 公開版では顔写真を削除しました)

Apduhan, Bernady O. (あぶどうはん ベーなでい O)

知能情報学科・助教授

フィリピンのミンダナオ州立大学システムのイリガン工科大学電子工学科を卒業して、講師を勤めた後、フィリピン大学の大学院で勉強を続けている時に奨学生に採用されて日本に来ました。

九州工業大学で学び、博士後期課程を修了して飯塚市の情報工学部知能情報工学科の助手になりました。博士前期課程では、マルチマイクロプロセッサのオペレーティングシステムを考案し、博士後期課程では並列分散処理環境についての研究をしました。研究の一方で、留学生仲間と留学生会を作って、日本人学生や地域の人々と交流を深めました。夏の間、ドイツのブレーメン大学に交換留学生に行った思い出もあります。

助手の時は、情報処理機構講座で共有メモリクラスターコンピューティング環境の主にソフトウェアの分野の研究を続けました。学生の実験や演習を担当し、学生の研究の指導、留学生や編入生に対する補講もしました。平成8年から1年間はアメリカのジョージア工科大学コンピューティング学部客員研究員としてアトランタで過ごしました。ちょうどその時開催されたオリンピックも観戦しました。平成6年から九州産業大学工学部で情報ネットワークを非常勤で教えています。

学会活動としては、IEEE Computer Society と ACM の会員で、情報処理学会の論文誌編集委員、IASTED-PDCS の Technical Committee Member と国内外の学会の運営委員を務めています。

今年の4月、情報科学部開設と共に情報科学部に赴任し、現在は1年生を対象に情報科学基礎演習を担当しています。その他、情報回路実験、オペレーティングシステムとシステムプログラミング、コンピュータネットワーク、並列アルゴリズム設計、知能情報学演習を担当することになっています。新しい学部で21世紀を担う技術者を育てることに意欲をもちています。

これからも、すぐ入手できる(コモディティ)ワークステーションやパソコンをネットワークでつないで、高性能並列分散コンピューティング環境を実現する研究を行い、クラスタで効率的な通信をするための通信プロトコルとその他の関連する研究を進めるつもりです。

